ボビのふしぎな発明

コーイケル 作　熊倉美康 訳

949.3 Kooiker, Leonie.

ボビのふしぎな発明

コーイケル著　熊倉美康訳

学習研究社

213p, 23cm, (世界の傑作童話・14)

原題：Het malle ding van bobbistiek

世界の傑作童話・14

ボビのふしぎな発明

訳　者・熊倉美康

発行人・渡部ひろし

編集人・石井和夫

印刷所・信毎書籍印刷株式会社

製本所・有限会社黒田製本所

発行所・株式会社学習研究社

東京都大田区上池台4—40—5

振替東京142930

©1975

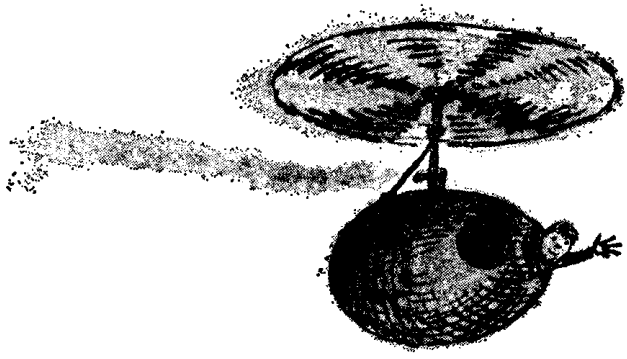
5001

■この本の内容に関する問合せ，製本上のミスなどありましたら，下記あてお願いします。
文書は，東京都大田区上池台4—40—5（〒145）学研　ユーザー・サービス部「児童図書」係
電話は，東京(03)720—1111（大代表）へ

ボビのふしぎな発明

○編集委員
大塚勇三
渡辺茂男
内田莉莎子

The queer thing of bobbistiek
by Leonie Kooiker
© 1970 Uitgeverij Ploegsma Amsterdam
Original Dutch edition published
by Uitgeverij Ploegsma Amsterdam, Netherlands
Japanese translation right arranged
through Charles E. Tuttle Co., Inc., Tokyo



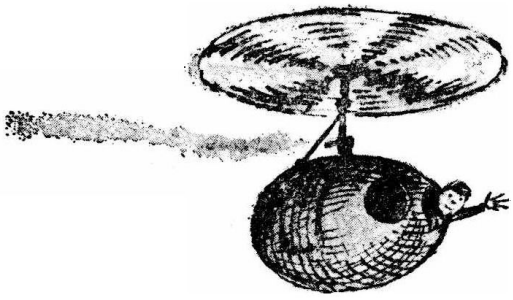
ボビのふしぎな発明

レオニ=コーイケル 作
熊倉美康 訳
カルル=ホランデル 画

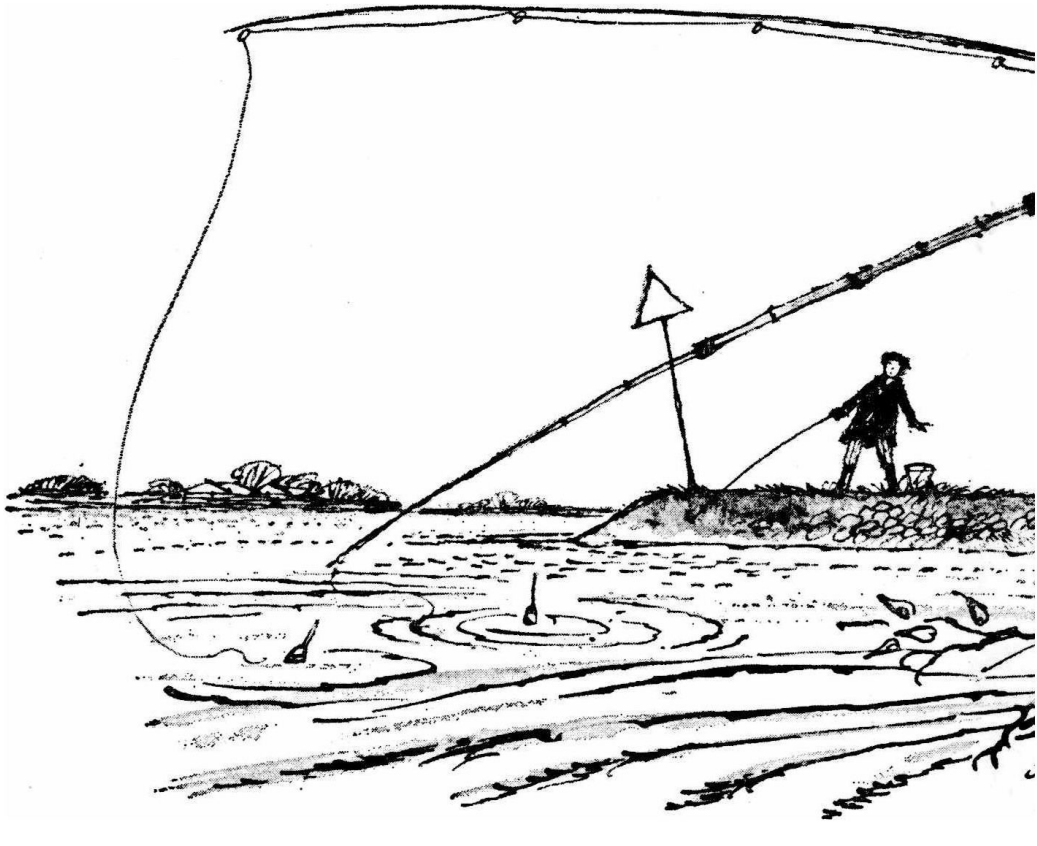
试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

もくじ

ふしぎなボビステック――7
みょうなたまご――18
やねからおりてきたたまご――29
とべたぞ！――40
さいしょの空の旅――58
宇宙船へむかう火星人――77
あやしい小男――88



タンクは、からっぽになった──103
ボビとアルベルトが見つけたもの──114
ゆくえふめいになったホイブ──123
コガネムシのケーキとイモムシのパン──139
いかりは、川からあげられた──149
フランスおじさんのもってきたニュース──165
小男のおくりもの──176
ふたりは、実演をやってみせる──186
計画は、いくらでもある──197
訳者あとがき──212



装丁　辻村益朗

ふしぎなボビステック

ボビは、魔法ののみものをつくるのが大すきでした。それをだれかにのませて、あいてをネズミやカエルにかえる気なんです。

魔法ののみものをつくるとき、ボビは、自分のへやの洗面台にある水差しを使います。そのなかに、ねりはみがきとインキをすこしと、ある植物の小さな葉っぱをいれます。その水差しを、だんろの上に三日かんほうっておいてから、さいごに、紅茶をすこしくわえます。

けれど、こうしてできあがった魔法ののみものは、見ただけできみがわるくて、だれものむ気になれません。そんなわけで、さいわい、ネズミやカエルにかえられたものは、いままで、ひとりもいませんでした。

ボビは、ときには、自分用の魔法ののみものをつくることがあります。そのときは、インキなんかいれません。そのかわりにドロップやチョコレート、キャラメル、それに赤ざ

とうをたっぷり、水差しのなかにいれます。それを満月の夜にニワトリの羽でかきまぜるのです。

これをのめば、動物のことばがはなせるようになる、と、ボビは信じていました。魔法がうまくきくように、わざわざ、ま夜中におきて、こののみものをつくりました。

けれど、ボビは、どうしても、ぜんぶはのめません。そのせいか、魔法の力も半分しかあらわれないで、動物のことばが、いくらかわかるようになった気がするだけです。イヌやネコやニワトリのことばは、ひとことともしゃべれません。ボビは、それがざんねんでなりませんでした。

ところで、ボビのかんがえでは、魔法ののみものをつくるとき、つぎの三つをまもることが、なによりたいせつでした。

まずだい一に、ぜったいに信じなければいけない。だい二に、注意ぶかくつくらなければいけない。たとえば、つくっているときは精神を集中して、けっしてうしろをふりむいたりしてはいけない。だい三に、チャンスをつかまなければいけない。ときには失敗することがあっても、くりかえしているうちに、とつぜんチャンスをつかむことがある。そ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

んなときは、なにかとくべつなことがおこるものだ。――ボビは、そう信じていました。ところがみなさん、そのとくべつなことがおこったのです！　でも、それをはなすまえに、ボビがだれで、どこにすんでいるのか、それからはなすことにしましょう。

＊

ボビの家は、ライン川とマース川がひとつになった大きな川の岸べにあります。その川は、ロッテルダムという町のほうへながれていて、たくさんの舟がボビの家のまえをとおります。ボビは、まい日、渡し舟に乗って学校へいきます。

ボビときょうだいたちは、いつも川の岸べであそんでいます。そして、川のちかくの男の子たちは、たいていそうですが、ボビたちも、きめられた時間に、なかなか、うちへかえってきません。だって、風に乗ってとんでいるカモメとか、川をいききする舟をむちゅうになってながめていると、つい時間なんかわすれてしまいますからね。

ボビのにいさんのアルベルトは、工作がとくいです。なにしろ四歳のときから、木工をやっていますからね。おとうとのホイブは、なにかというと大声をだしてさけぶくせがあります。いちばん下のアンネリチェといういもうとは、ふとっていて、白っぽいかみのけ

をしています。まだ小さいので、ボビたちのあそびあいてにはなれません。

ボビの家は、岸べの堤防のすぐ下にあります。高いたてもので、古いけれど、ボビたちは気にいっています。かくれんぼができる戸だなもあるし、ひろい庭にはブランコもあります。温室や、工作のできる物置もある、とてもすてきな家です。

ある日の夕方、おかあさんが、アルベルトにたずねました。

「アルベルト、あなたのポケットには、なにがはいっていたの？」

「ぼく、なんにもいれなかったよ。」

「なにいってるの。あなたのポケットには、マッチ箱、くぎ、ねじ、小さな木ぎれ、ハッカの葉、自転車の電球、いろんなものがはいってたわよ。おまけに、もうひとつのポケットには、なんだか石みたいな、かたいかたまりが、くっついていたわ。あれはいったい、なんなの？」

「ぼく、かたいものなんて、もっていなかったよ。」

「にいさん、ねんどをもってたじゃないか。」ホイブがいいました。

「ああ、そうだ。ぼく、ボビのねんどをもっていたっけ。だけど、あれ、かたくないよ。」
「ボビ、あなた、そのねんどを、どうしたの？」
「あれは、ただのねんどだよ。」
「いいえ、あれは、ただのねんどなんかじゃありません。わたしはこれまで、あなたたちのポケットから、なんども、ねんどを見つけたわ。だけど、こんどのは、いつものとちがって、かたいわ。」
「つくったときは、かたくなかったよ。」
「つくったですって？　ボビ、どうやって、つくったの？」
「ぼく、ふつうのねんどと石けんで、つくったんだ。」
それなら、石けんであらえば、おちるかもしれない、とおかあさんはおもいました。いそいで、あついお湯をかけたり、ベンジンでふいたりしましたが、でも、どうしてもとれません。
おかあさんは、はらをたてて、ポケットを、はさみできりすてました。そして、あたらしいポケットをくっつけようとしましたが、うまくいかず、とうとう、ズボンごとすてて

しまいました。

その晩、いちどベッドにはいって、ねたふりをしたアルベルトが、しのび足で、ボビのへやへはいってきました。

「あのねんど、おかしいね。」

「あれは、ぼくが、ずいぶん時間をかけてつくったんだ。だけど、かたくなったことないよ。」

「おまえ、もっともってるかい？」

「これだよ。ちょっとかたいけど、まげられるよ。」

「どれ、見せてごらん。ねばっこいや。まるでゴムみたいだ。」

「水でぬらしてごらんよ。」

「だめだよ。水道の音が下のおかあさんにきこえちゃうよ。」

「この水差しに水があるよ。」

「よし、ぬらしてみよう。あれっ、シューッて音がするぜ。かたくなるらしいぞ。やあ、

鉄みたいにかたくなったぜ。だけど、すこしやわらかいところもある。おれるかどうか、ちょっとためしてみようか。」

「おるなよ！」

「しーっ。大きな声だすなよ。」

「かえしてくれよ。ぼくのだから。」

「もっと、つくってみろよ。」

「でも、つくり方を、よくおぼえてないんだ。おとうさんの写真のげんぞう液も、すこしいれたよ。あんまり使うと、おとうさんに気づかれちゃうよ。」

「じゃ、おとうさんにちゃんといって、もらえばいいさ。」

「いやだよ。にいさんいえよ。」

「いうよ。」

「ぼくが、とったこと、いわないでよ。」

「よし。だったら、このねんどを半分くれ。」

「いやだ。せっかく、ぼくが発明したんだもん。」

「だけど、おまえは、もうつくり方をおぼえてないんだろう？」
「ほんとは、おぼえてるよ。――いたいっ、やったな！」
ふたりは、とうとうけんかをはじめました。そのさわぎは、もちろん下まできこえました。おかあさんの声がしました。
「はやく自分のベッドにもどりなさい！　しずかにするんですよ！」

アルベルトが自分のへやにもどったあと、ボビは、なかなかねむれませんでした。こんどこそ発明が成功したのだと、わくわくしていたからです。
じつはボビは、はじめは『すがたをけすぬりぐすり』を、発明するつもりだったのです。ところが、そのぬりぐすりが、こんなにかたくなってしまいました。もし、そのぬりぐすりを、自分のからだにぬったまま、うっかり、おふろにはいったら、くすりはきっとかちかちにかたくなり、ボビのからだも、こちこちになったにきまっています。それは、すがたがきえるなんてことより、ずっとずっとおそろしいことです。ボビは、このぬりぐすりを、ためさないでよかったとおもいました。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com